

# ユンタの語義をめぐつて

狩 俣 恵 一

がむしろ有力である。これは結い作業、共同作業の労働歌の意である。

小野重朗『南島の古歌謡』二三頁

ユンタの語義の研究は、二つの立場の研究者によつて行なわれてきた。すなわち、南島文学の研究者と本土古代文学の研究者の両者による研究である。前者は、ユンタそのものの本質を明らかにすることを目的としたもので、小野重朗氏・宮良当壯氏・喜舎場永珣氏

・宮良安彦氏・崎山直氏などの研究がその代表である。後者は、古代歌謡に於ける「謡歌」の性格を明らかにすることを目的としたもので、土橋寛氏の研究がある。また、藤井貞和氏のユングトウの語義の研究も、土橋氏の研究に準じて理解することができよう。(8) ここでは、ユンタの性格をより明らかにするため、八重山方言を基礎として考察を進めて行きたい。

## 1

ユンタの語義について、これまでの研究をまとめてみるとおよそ次のようになる。

- (A) 「ユイ歌」説  
(B) ユンタの語源を読み歌とする説もあるが、結い歌とする説

(B) 「ユイ歌」説  
さて、わたしはここで専門家に一笑に付されるのを承知の上で、ひとつつの臆説を提示しておきたい。それは先ほどの図にも示しておいたように、「世」(ゆ・ゆう)を希求し讃える意味をもつて歌われたに違いない「世ぬうた」(ゆぬうた。  
ゆうぬうた・ゆうた)についてである。結論を先にいえば、これが八重山古謡のひとつ形態である「ゆんた」の語源もしくはその語意であろうということだ。

崎山直『八重山文化』六号八頁

「ヨミ歌」説  
「ユンタ」は歌と称する漢字が輸入された以後にできた古謡で、「誦み歌」から転訛したものである。すなわち心の思

いを歌に誦んだのである。

喜舎場永珣『八重山古謡』上

いい世たぼーらる

一 豊作を賜わろ

竹富島『種子時狂言』

(四) 「ユム歌」説  
ゆんたの語源は、八重山方言動詞「ゆむん」(YumuN) のいわゆる連体形「ゆむ」(Yumu) に「uta」という方言名詞がついた「ゆむうた」(Yumu uta) から「ゆむだ」(Yumuuta) になり、「ゆんだ」(YuNta) と音韻転訛してきただもののが、ゆんたの語源であると思われる。

宮良安彦『八重山文化』三号一〇〇頁

まず、「ユム歌」説の(A)を見てみよう。この説は、ユンタが結い作業の中で歌われたことに着目したもので、「ユイ歌」説の主流をなしている。ユンタの歌われた場から導き出された説だけに、かなりの説得力を持つものである。しかし、ユンタは必ずしも、結い作業の場・労働の場だけで歌われるものではない。すでに、宮良安彦氏や崎原恒新氏によつて報告されているように、祭祀の場で歌われるユンタも見受けられるのである。

祭祀の中で歌われるユンタは、結い作業の場から流れ込んできたものであろうか。次に掲げる資料は、結い作業の場から祭祀の中へというユンタの流れを否定しているように思える。

△資料1

世持  
種子時いて、家いぬてんな  
ゆんたの巻踊いしーおーりていどう  
いい世たぼーらりおつたとう  
ばよんゆんたの巻踊いしー

えー、昔の老人達は  
種子を蒔いて家に帰る途中  
ユンタや巻踊りをなさつて  
豊作を賜わつたそだ  
我々もユンタや巻踊りをし

右の科白は、種子取祭りで演じられる嚴肅な例狂言の中の『種子時狂言』の一節である。例狂言とは、例の狂言のことで、この祭りの中では必ず演じられなければならない狂言という意味である。この『種子時狂言』は、最初、村の責任者である世持(今でいうならば、さしづめ公民館長というところである)が登場し、名告りをした後、これから種子蒔きをするという口上を述べる。その後、島の若者達を呼び出し、実際に鉾を持ち、ウタをうたしながら農作業の仕種をする。これは、まさしくモノマネ芸能ともいいうべきもので、このときは必ず実際に農作業で使用していた鉾を持つことになつてゐる。このようにして、種子蒔きを終えた後、家へ帰るときに述べるのが、△資料1に示した科白である。

この資料から考えた場合、ユンタは、種子蒔きを終えた後、家へ帰る道中で歌われたものであるということが明白である。しかも、帰宅の道々で歌うことが豊作を齋すと信じられていたのである。つまり、△資料1で述べられているユンタは、結い作業の場で歌われる労働歌謡ではなく、豊穣予祝的な性格を持つた道歌であることがわかる。従つて、結い作業の場・労働の場で歌われたユンタが今日数多く残っていたとしても、ユンタの場を単純に結い作業と断定するのは早計である。あらゆる場で歌われているという事実に目を向げず、はじめから結い作業の場で歌われたと決めてかかっている「結い歌」説の(A)には同意できない。

「ユム歌」説の(B)は、ユンタの形式から考えたもので、甲組乙組に分かれて交互に歌い交わすユンタのやりとりを「結い」とみなし、そこから導き出した説である。しかし、ユンタの掛け合いそのもの

を「結い」と表現する言葉は八重山に存在しない。従つて、この説は否定されるべきであると考える。

次に「ユーリー歌」説について考えてみる。ニンタが予祝的な性格を強く持つているということは、先にも述べたとおりである。そして、そのことはすでに土橋寛氏によつても指摘されている。<sup>(1)</sup> その意味に於いて、「神ぬ世」（豊穣）への讃美ないし希求の説には、ある種の魅力を感じる。

しかし、具体的なウタであるニンタの語義が、ユートピア的な、「神ぬ世」への信仰と直接的に結びつくと考える論理には飛躍があるようと思える。すなわち、逆に言うならば、「神ぬ世」への希求・讃美という抽象的な言葉と、ニンタの内蔵する予祝的な性格を、安易に結びつけすぎではないかと考へるのである。案の定、崎山氏はニンタ・ユングトゥだけではなく、アヨー・雨乞チヂまでも「神ぬ世」と結びつけて理解しようとしている。

ニンタには、豊穣希求の内容のものだけでなく、恋愛・動物・植物・生活苦などを歌つたものもたくさんある。そのような多様性に富んだ内容のニンタを、「神ぬ世」への希求・讃美という抽象的な形で括るのは、比較的便利であると同時に、危険でもあろう。さらには、崎山氏は言う。

だからへゆぬうた・ゆうぬうた／なる歌が始まから定型化されてあつたのではなく、「神ぬ世」への期待と帰依、そして同時に「人ぬ世」への共生感ないし共同体的紐帶という気持のなかから即興的にうたわれてきたもので、後にそれらは「ゆんた」として民衆の中に定着化する。

『八重山文化』六号十一～十二頁  
つまり、神の世界への期待と讃美、人間世界のさまざまな出来事、

そういうさまざまなもののが即興的に歌われてきた。そして、それらの歌謡が後に、ニンタと呼ばれるようになつた。そのニンタという名称とさまざまことを即興的に歌つた歌謡とを結びつけるものが「世」の思想である。崎山氏の右の言葉は以上のように理解できるのだが……。果たして、そこに学問的な論理が認められるだろうか。

喜舎場氏の「ヨミ歌」説は、本土の言葉をそのまま八重山の方へ引き移したものである。そのことは、「心の思いを歌に誦んだ」と述べていることから明らかであり、和歌のウタヨミの世界を想定しているようである。従つて、南島独特の歌謡であるニンタの語義を、右のよう理解することはできないと考へる。

一方、宮良氏の「ユム歌」説は、八重山方言によつて、ニンタの語義を明らかにしようとしているところが注目される。その意味に於いて、喜舎場氏の「ヨミ歌」説を一步前進させたものと評価できよう。しかし、言葉の上で「ユム歌」説は支持できたとしても、何故「ユム歌」説を探るのかという論拠が述べられていない。従つて、この説も不完全な考え方だと言わざるを得ないのである。

### 三

さて、これまで、先学の説を整理しながら述べてきたことからも理解できるように、ニンタの内容は多様性に富み、歌われる場も不特定である。このようなニンタの語義を考えようとして、先学が失敗した最大の理由は、多様性に富んだニンタの内容を特定の内容にあらかじめ限定してかかつたり、不特定な場のニンタを特定な場に限定しようとしたことであった。また、さまざまな内容を持つニン

タをさまざまの意味を持つ語に対応させたり、本土の言葉をそのまま引き移したり、言葉だけに把われ過ぎたりしたこと、ユンタの語義を解説することを困難にさせたのである。

ここでは、広く南島全般的な視野に立って、ユンタの語義を探究して行くことにしたい。そうすることによって、狭い八重山のユンタにのみ拘泥してきた先学の弱点を克服できると考えるからである。まず、南島に分布する歌謡の名称を見ていくことから始めよう。

奄美………ユングトウ・ナガネ・八月歌・ウタ（島歌）

沖縄………クエーナ・ウムイ・オモロ・ウタ（琉歌）

宮古………フサ・ニーリ・アーヴ・クイチャー・トーガニ・シンカニ

八重山………アヨー・ユングトウ・ジラバ・（ユンタ）・節歌

これを見てもわかるように、ウタという名称、及び「節歌」「八月歌」などのように○○歌となっている名称が非常に少ない。しかも、興味深いことに、いま問題となっているユンタを除くならば、いわゆる古謡の中にはウタ（歌）という名称は存在しないのである。すなわち、奄美のウタ（島歌）・沖縄のウタ（琉歌）八重山の節歌は比較的新しい歌謡であり、それらはすべて三線の伴奏によつて歌われる。また、奄美の八月歌は三線の伴奏では歌われないものの、そのほとんどが八八八六の琉歌形式で歌われる新しい形式の歌謡である。

ユンタを除いた場合、何故南島にはウタの呼称のついた古謡が存在しなかつたのだろうか。その理由は、南島に於いて、ウタという言葉が比較的新しいものであり、定着した言葉ではなかつたためと考えられる。特に、八重山ではそのことが顕著であり、ウタウといふ動詞も古くは存在しなかつたと考えられる。

## △資料2 √ジラバ

一、ユンタ<sup>シヨウ</sup>ウラ  
イー・ハーヴィ（離）

ジラバ<sup>シヨウ</sup>ウラ  
サニイヤサ（離）

ヨーホーナ（離）

バガケーラ  
「ヨンタ」を謡いましょう

「ジラバ」も唄いましょう

私共みんなで合唱しましょう

## 二、ユンタス<sup>スン</sup>主 ジラバス主

ユンタの主人公もジラバの主人公も別にいるのではない

謡う者が主人公で合唱するのが主人公である

## 三、イズ<sup>スドウ</sup>主 ナミル<sup>スドウ</sup>主

（以下略）  
「ナミル」は「揃える」である。

△資料2の△部の「シヨーラ」「イズ」「ナミル」を喜舎場氏は、「ウタウ」「合唱する」と訳しているが、これは意訳である。直訳するならば、「シヨウラ」は「しましょう」であり、「イズ」は「言う」、

「ナミル」は「揃える」である。

△資料3 √夏ヌ南風ジラバ  
三、イズ<sup>スドウ</sup>  
ニムスドウ  
主ヤル

謡い出すのが主取りだ  
言い出すのが  
主取りだ

△資料3▽は、紙幅の関係上一節だけを抜き出したが、そこでもやはりウタウという動詞は使用されておらず、「イズ」「ヨム」で代用している。

右の△資料2・3▽によつて、八重山方言動詞には、ウタウといふ動詞が存在しなかつたことは明白である。しかも、南島全般に渡つてウタという名称のついた古語が存在しなかつたことも先に述べたとおりである。

ところで、このようにウタウという語が存在せず、ウタという語もあまり普及していなかつたと考えられる状況の中で、独りニンタのみが、「ユイ歌」にしろ、「ヨー歌」、「ヨミ歌」、「ユム歌」にしろ、「〇〇歌」という名称を持つと考えられるのである。これは他の南島古語と比較した場合、きわめて特異な名称と言わざるを得ない。

一体、ニンタの語義が「〇〇歌」であるというのは、どういう理由に拠るものだらうか。そう考へてきたとき、思い浮かぶことはユングトウとの対応である。すなわち、ニンタが「〇〇歌」という南島でもきわめて特異な名称になつたのは、ユングトウの「〇〇言」との対応のためであつた。「ヨン言」という名称の歌謡と区別するために生まれたのが「ヨン歌」だったのである。とすると、ユングトウとニンタのヨンは同義であり、ユングトウの語義を明らかにすることが、ただちにニンタの語義を明らかにすることになる。

#### 四

ユングトウの早言葉的な要素に着目し、ニンタの語義と対応させながら「誦み言」説を展開している。<sup>(14)</sup>また、宮良安彦氏は「ユムン」という八重山方言動詞に着目し、「ユムン」の意味が「べづべづ一個人言を言う」「わがままを言う」ことであるとして、「ユムン事」説を述べている。<sup>(15)</sup>

ユングトウの旋律・内容・形態などを考えた場合、宮良安彦氏の「ユム事」説に魅力を感じる。

ユングトウは個人でうたうもので、対語・対句を用い時間的・進行的にあることがらを譯々と述べていくものである。しかも、その旋律には「歌う」と「語る」の未分化状態のようなものと完全に「歌う」ものの二種類がある。<sup>(16)</sup>「ユムン」という八重山方言動詞は、まさしく右のようなユングトウの特色を兼ね具えた言葉である。

ユムンの意味は、「べづべづ一人言を言う」であり、「よどみなくしゃべる」である。また、「巫女などが神意の状態に這入つて、傍人の覺り得ぬやうな事を譯々と纏述する」のもユムンである。しかも、興味深いことに、このユムンには右の意味以外に、音楽的・旋律的な意味をも含んでいる。「口説ユム」という表現がそうであり、黒島口説の中には次のような詞章がある。

#### △資料4▽

△資料4▽

やしに  
口説ゆみゆみ

この場合のユムは、一般に口説の踊り手が述べる、歌うような語るような旋律を指していると見てよいだらう。つまり、口説の踊り手の口上がユングトウの旋律と近いことから、「口説ユム」という表現になつたのである。ところで、この△歌うと△語るの未分化状態のような旋律を意味するユムは、後にわづかではあるが△歌

<sup>(13)</sup>

喜舎場永珣氏は、

う▽という意味を持つようになつてくる。先にあげた△資料2▽の

「ユムスドウ主」という表現は、専ら△歌う▽という意味で使われている。まさしく、八重山方言動詞ユムンは、ユングトウの特色と符合した言葉であると言えよう。

そのユングトウは、古くは「ユム事」で、古い旋律は△歌う▽と△語る▽の未分化状態であり、その旋律が発達して専ら△歌う▽と△向へと進んでいったのである。そして、ユングトウの旋律的な発達とウタという言葉の八重山への流入が相俟つて、ユングトウの意味を変化させていった。すなわち、「ユム事」が「ユム言」となり、それに応じて「ユム歌」という言葉が生まれたのである。

かくして、「ユム言」「ユム歌」は、「ユングトウ」「ユンタ」と音韻転訛していくのである。

六号

- (6) 土橋寛『古代歌謡と儀礼の研究』三五八頁  
(7) 藤井貞和『古日本文学発生論』一一〇一二〇頁  
(8) 土橋氏は専ら読歌と関連しての「ヨム」の研究であるが、藤井氏は「ヨム」そのものに主題をおいている。

- (9) 宮良安彦『八重山歌謡ゆんたの特質』『沖縄文化研究』五号  
(10) 崎山恒新「ユンターラたう場」『国文学解釈と鑑賞』昭和五四年七月号  
(11) 土橋寛『古代歌謡と儀礼の研究』三六一頁  
(12) 専ら太鼓によつて歌われる。

- (13) 宮良当壯『琉球文学』創刊号一一〇一二頁  
(14) 喬倉永珣『八重山古謡』上  
(15) 宮良安彦『南島古謡』七五六頁  
(16) 抽稿「奄美諸島と八諸山諸島のユングトウをめぐって」『沖縄文化』五一号

これまでに述べたことによつて、ユングトウとユンタの語義、およびそれらの語義的な関連性についてはほぼ理解できたと思う。しかし、右の論をより確実なものとするためには、ユングトウとユンタの内容・形態の関連性をより詳細に述べなければならない。そのことについては、次の機会に譲る。

- (1) 小野重朗『南島の古歌謡』二三頁  
(2) 宮良当壯『八重山古謡』第一輯序  
(3) 喬倉永珣『八重山古謡』上  
(4) 宮良安彦「沖縄八重山諸島の歌謡文芸——八重山歌謡あよー・ゆんだ・じらばの語源——」『八重山文化』三号  
(5) 崎山直「世の思想——ユートピアをさぐる——」『八重山文化』